

正宗白鳥全集

第十一卷

正宗白鳥全集

第十一卷

隨筆二

新潮社版

正宗白鳥全集 第十一卷

昭和四十三年一月二十五日 發行
昭和五十一年八月三十日 セット版

全十三卷セット定價五二〇〇〇圓

著 者 正 宗 白 鳥

發行者 佐 藤 亮 一

印刷所 大日本印刷株式會社

製本所 新宿加藤製本

發行所 株式會社 新潮社



〒東京都新宿區矢來町七一
電話 業務部(〇三)三六二二
編集部(〇三)六二五二
振替 東京四一八〇八番

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

正宗白鳥全集

第十一卷

編集

中島河太郎

監修

河上徹太郎
小林秀雄
中村光夫
山本健吉

第十一卷 目次

モスクワより……………	九
レンングラードにて……………	九
ヘルシンキより……………	一〇
旭日のヒトラ―……………	一〇
北歐の旅より……………	一一
西洋見物記……………	一三
巴里より……………	一四
歐洲を離れる日……………	一五
ボウドレエルの墓とフロオベルの家……………	一五
作家の海外進出を……………	一三
アメリカの芝居……………	一三
隣邦ロシア……………	一五
郷愁……………	一六
演劇雜感……………	一五
亞米利加素描……………	一五
獨り合點……………	一六
鍵……………	一七
思出すまゝに……………	一六
無用人……………	一六

獨斷語……………	一六
批評難……………	一〇一
思想・無思想……………	一〇三
劇場にて……………	一一五
地獄極樂……………	一二九
奇蹟と常識……………	一三三
老若……………	一三九
世渡り上手……………	一四四
ヨ―ロツパを想ふ……………	一五九
感想……………	一四三
年頭の辭……………	一四四
雜文帖……………	一五五
アメリカに關して……………	一六六
所感……………	一八一
讀後の疑惑……………	一八三
年末所感……………	一八六
高原短信……………	一九〇
高原生活……………	一九三
八月十五日の記……………	一九六

勸進帳と助六	一七
ソ聯十日	二〇三
北歐の夏	二〇七
中歐の秋	二二三
晩秋の頃	二二九
新年の思ひ出	二三四
新年を迎へて	二三七
少しづゝ世にかぶれて	二三九
私の書齋	二三三
忠臣藏耽溺	二三四
高原にて	二三八
映畫見物	二三九
すべて路傍の人?	二四〇
舊劇と新劇	二四五
觀劇妄語	二五一
蘆花と現代	二五三
書齋通信	二五三
御前座談會の記	二五九
座談會出席の記	二六一

如是我觀	二六七
藝術家の死	二六八
映畫『ハムレット』	二七〇
秋のドライブ	二七四
閑居妄想	二八一
圓本のことなど	二八二
旅中の印象	二八五
受賞の日	二八〇
正月顔	二九一
初夢	二九三
曉の夢	二九四
東京通ひ五六年間	二九六
映畫演劇隨想	二九九
チャップリン所感	三〇一
輕井澤今昔	三〇三
今日は帝劇、明日は三越	三〇五
今年を回顧して	三〇九
昭和三十年	三二三
ハムレット芝居	三二五

芝居ばなし	三六
人氣役者の正體	三〇
テレビジョン	三三
ぜいたくな生き甲斐	三三
人生おとぎばなし	三五
爐邊雜感	三七
現代つれづれ草	三一
花より團子	三五
閑人閑話	三五
私とゴルフ	三八

樂隱居	三九
祖先の家	四二
私の遺言狀	四〇
目がさめたやう	四〇
一つの祕密	四〇
たべ物のさます	四三
「歌會始め」陪聽記	四五
白鳥百話	四六
滅びゆくもの	四〇

解題

中島河太郎 四三

隨筆

(二)

モスクワより

豫想と實際とは大抵相違してゐるものだが、シベリアは沙漠のやうな所かと思つたら、窓外に映る光景は、緑野の連續である。風光明媚だ、さまざまの草花に色どられてゐる。爽かな風が吹いてゐる。たゞ、二重窓で締切られた室に押込められてゐるのだから、日によつては酷烈な暑氣に苦められる。そのくせ、朝は寒い。攝氏三十度を越えた狭い部屋に靜座してゐると、囚人として護送されてゐる感じがする。東京市會議員をはじめ、一、二等だけで、日本人が殆んど二十人に達してゐるので、賑かだが、皆んなが、さまざまの食料を持參してゐる。そしてみんなが後悔してゐる。私など定食券でも買つてをれば、食物はそれで十分だ。料理は聞いてゐたほど悪くない。私には湯沸しとコップと果物だけが用をなし

ただけだ。

ウラルを過ぎると、人里近くなつた感じがするが、暑さはますます酷しい。モスクワの市街は火に燃えてゐるやうだ。五十年振りの暑さださうだが、そんな時に出くはさなくつてもよかつた譯だ。しかし、來た上は仕方がない、暑氣を冒して努力して見ようと苦しい決心をしてゐる。

レニングラードにて

モスクワに來て一週間、ゆるみなき暑氣で爽かな涼味には全然接し得られなかつた。ホテルの我部屋は徒らに廣いばかりで、隅から隅まで朝日が差込むので、午前中は身の置所のない有様であつたが、それよりも弱つたのは蠅の多いことであつた。何處へ行つても蠅が多い。その蠅も日本のよりも大きくつてしつこい。朝から晩まで、顔や手足を蠅に舐められ通しでは、靜かに物を考へることも鑑賞することも出來よう筈がない。ロシア人が蠅にも南京蟲にも無感覺であるには驚く。私は日本から蠅取粉をもつて來なかつたことを遺憾とした。

しかし、レニングラードに來て、はじめて旅行苦から解放

されたやうな身心の爽快を覺えた。ビーター大帝の馬上姿のあたりに戀うて、ネヅ河を隔てゝ落日を仰いだ時は、私も久振りに詩を感じた。

ヘルシンキより

レンングラードでは利用し得られる限り旅行會社の巡覽自動車に身を託して見物したのだが、お仲間はすべて米國人で、それも過半は老人であり、しかも大抵は老婆である。日本では世界漫遊は、若年者の企つべき事のやうに思はれてゐるが、米國では、田舎の婆さんが、互ひに組をつくつて、毎年あちらこちらに氣保養に出掛けるのである。洋行なんて大袈裟に力み返つて考ふべきものではないらしい。

人民裁判所とか、育児所とか、工場とかを視察して、活潑なる若い女案内者の通譯によつて、新知識を得るのであるが、米國老婆連はなか／＼熱心な質問を試みて、手帖に書留めたりしてゐる。私はいつも退屈でたまらない思ひをした。

ロシアの國境を出て、フィンランド領へ入ると、兎に角ホツとした氣持がした。旅行者として、暗々裡に或は明白々と受けてゐた壓迫、束縛から解放された感じだ。

旭日のヒトラー

ベルリンより

ストツクホルムは類稀^{まれ}なる美しい町である。海洋と島嶼^{しま}と市街とが融和して夢見るやうな光景を我々の目に映じさせる。住民もかねて聞かされてゐる如く穩和で親切であるらしい。だが、私は、透通^{ちう}るやうにすが／＼しいフィンランドやスウェーデンを經過して、嘗て知らぬ快さを覺えるとともに、小國の民になりたくないといふこと、何故ともなく直感した。立寄らば大樹の蔭といふことを感じた。自由主義といふもの手頼りなさをも感じた。私はストリンドベリのストツクホルムから、イブセンの故郷オスロへ向ひ、天下の奇勝フィヨルドをものぞいて、デンマークを経て、オリムピツク終了後のベルリンへ赴く豫定であつたが、ストツクホルムの大使館へ立寄ると、そこにゐた白鳥公使が（紹介された譯でもなく、何の緣故もなかつたに關らず）私達を招いて、好意を示され、由緒ある穴倉の料理屋で午餐を饗せられたり、風光明媚^びな地域をドライブされたり、自宅の日本料理までも惠まれた

りしたあとでオリムピックへ行く氣なら、ベルリンへ交渉して宿をどうかしようと思合はれた。私達はさう無理をしてまで出掛ける氣はなかつたし、公使館員も望みをかけなかつたやうであつたが、潤達な公使は宿がなければ大使館に泊めて貰へばいゝと簡単に片付けて館員に電話をかけさせた。宿はどうかするとの返事がベルリンからあつたので、私は好意に背いてオリムピックを抛棄してノルウエーに向ふ譯に行かず、翌日、豫期しなかつたベルリンに來ることにした。宿は個人の家なので、氣兼ねでいけないのだが、そんな我儘は云へなかつた。

それで水泳を四日見た。日本選手の勝利をも目睹して大いに感激した譯だが、最終日の閉會式に列して場内の壯大美に驚いたのである。これだけでわざ／＼見に來る價值は十分にあると思つた。何十萬であるか知らないが、こんなに多數の人間が一場に集まつたのを私は無論生來見たことがなかつた。最後まで座を立つものがなかつたが、これだけの人間が一どきに退場したらいかに雑踏するであらうかと、私は多少危険を覺えた。しかし、出て見ると氣遣つたほどでなかつた。言葉の分らない、方角も知らない私達が、巨大な人間の間にまじつて押潰されることもなく悠々と歩いて、ちゃんと電車にも乗れて、家まで歸れたのである。オリムピック競技そのものよりも整然とした沈着な光景が、私には最も感銘が深か

つた。

私はドイツ語はちつとも分らずドイツの新聞は讀めず、何が何やら暗中摸索だが、兎に角もつとこの地に留まつて、ヒトラー英傑の治下の社會状態を見てゐようと思つてゐる。水泳競技場に於て正面にこの英傑を凝視し、或ひは往來で彼の御通行の光景を見てゐると、豐太閤の榮華もこれには及びがたいと空想される。天下取りのいい氣持が私にも推察されないことはない。

今日、日本料理屋で偶然近着の或る日本の新聞を見ると、私がオリムピック開會式に列席したやうに書いてあつたが、無論出鱈目の報道である。私は八月十六日の最後の閉會式に出ただけだ。

北歐の旅より

ストリンドベリーの墓

ストックホルムに着いたときに、ふと思ひ出したのは、小宮豐隆氏のスウェーデン紀行であつた。ストリンドベリーの墓に詣でんとして、旅館の女主人にその在所をたづねたが、

ハッキリした答へを得なかつたので、この文豪が故郷ではあまり重んぜられてゐないのを小宮氏は不思議に思つたらしかつた。この風光明媚な平和な町は、ストリンドベリーには相應しなさうだ。故人の墓なんか、強ひて見たいとは思はないが、墓所が知れたら行つてもいゝ位な興味は有つてゐた。

この町の市廳は、美術館のやうな美しい建物で、こんな所で俗事を議するのは不似合なやうであるが、その建物のなかが大石でつくられ、ストリンドベリーの裸體像が据ゑられてゐるさうだ。この文豪の記念物はこれくらゐで、他に何もなささうなのは自國に産出した有名人を尊重する西洋では珍らしいと云つていゝ。私も市廳を見物しながらその裸像を見落した。市廳の部屋々々を見たらうちで、最も面白いと思つたのは或部屋の壁の上部に、人の一生を描いてゐることであつた。生れた時、幼少の時、名譽と戀愛に酔つてゐる時、子供を持つて重い石の下に喘いでゐる時、病氣の時、老衰の時、最後の葬式の時と、人生を七様の光景によつて現はしてゐた。通俗な繪説きに過ぎないが、こんな繪の下で、市會が開かれるのは面白いやうである。

私はベルリンへ向つて發つことになつた晩、偶然公使館勤務の青年某氏に會ふとストリンドベリーの墓の話が出て、こちらは日が長いから、これからでも墓地へ行けないことはな

いと云ふので、私は氏に導かれて、文豪の墓所參詣に出掛けることに決した。タキシーの運轉手はその墓を知つてゐるさうであつた。ストツクホルムは海洋によつて美を放つてゐるのだが、共同墓地の方は海にそむいた郊外で、綠葉綠草の美しさは北國の日暮れの薄い光と融和して來て人を夢心地にさせるやうであつた。

墓は簡素な十字架で、黒く塗られた樅の木に、ラテン語のお經の文句らしい金文字が浮き出してゐるだけであつた。墓前は紅の花で彩られてゐたが、他國の文豪の墓碑の大袈裟な有様とは比べ物にならなかつた。運轉手は「豪い人を葬る所はこの近所にあるのだが、ストリンドベリーは、そんな所に葬られるのを好まなかつたので、後人がその意志を重んじてこゝに葬つたのだ」と、譯ありげに云つてゐたが、その話の眞實性は疑はしかつた。

墓地から市中へ歸つて、「赤い部屋」をも訪ねた。今も榮えてゐる料理屋の二階なのだ。運轉手は或狭い町の角にある建物を指差してこの部屋でストリンドベリーは死んだのだと教へたが、そこは、いかにも詰らない建物であつた。

西洋見物記

レニングラードから數十分、ソヴィエト聯邦の國境を越えて、フィンランド領に入ると、同じ地続きでありながら、車窓の左右の光景が一變したやうに感ぜられた。人家も男女の風俗も清楚たる趣きを呈して、はじめて純粹の歐洲の地に踏入つた氣持がした。ロシア通過中の心の煩はしき、重苦しさから解放されたやうであつた。

レニングラードでは、午前と午後、或は夜と連續して、インツユリストの遊覽自動車を利用してさまざまの見學を試みたのであつたが、お仲間はずべてアメリカ人で、それも大抵は老人であり、多くは田舎の老婆連であつた。老後の思出に、ロシアといふ風變りな土地を一瞥しようと志したのに過ぎないらしい彼等と車を同うするのは私などにも相應はしいのである。だが、彼等は北方の海洋を船で渡つて來て遊山氣でのびやかに旅を續けてゐるから結構だ。我々はシベリアの車内の暑さで苦められた。旅行を思立つて以來、滿洲里の先のソヴィエト國境に入るまで、この正體の分らぬ國家の煩瑣な旅客取締法に不安を感じ、むしろ恐露病と云つてもいゝ

やうなものに憑かれてゐたのである。日本人の多くが北極探險にでも出掛けるやうに、さまざまの食物を持込んだ後で仕末に困つたのも滑稽だが、シベリア鐵道の物は、隨分のんびりして間の抜けた趣のあるものだ。ルーブル價の關係から我々は露國滞在中はクーポン制度を利用することゝし、車中でも食券を豫じめ買つて來たのだが、食堂では一等券も二等券も無差別で誰れにも同じ物を食はせるのだ。それに、食卓に就いてから一時間も立たなくては料理にありつけないほどサービスが悠長で、しかも、先の客後の客の順序が念頭にないらしく、すべてが出鱈目なので、後で思出すと、物に拘泥しない彼等の態度が面白いが、その時は随分齒痒くも憎らしくも感ぜられる。日本流に考へると、彼等は客を客と思つてゐないらしい。眼前に客が座に就いてゐようともしんな事におかまひなしに、彼等は食卓の一隅に安座して、悠々と食事を取り、それがすんでから、さてこれから食券持參者に食を配けてやらうかと用意するらしく見られる。

汽車の延着は常例であるさうだが、遅れたつて取りかへさうとはしないらしい。はじめは無責任のやうにばかり思はれてゐたが、長い停車のたびに下りて見てみると、車輛の検査だの給水だの、いろんな必要な事をやつて、なまけてゐる譯ではなさうだ。何しろ、一日半日で終點まで行けるやうな汽車ではなく、七日も十日も曠野の中を突破するのだから、

時間通りに、一分一秒たがへないことは無理なのだらう。停車時間の長いのも悪くはないので乗客はその間に下車して涼を納れ鬱を散じ、この沿線住民の生活状態に興味を覚えるのである。兵士のみが榮えて、一般人民の窮乏な有様を、誰れしも一様に認めて同様な感じを起すのであるが、そこから進んだ立入つた考へは各人各様であるらしい。

延着し續けた長途の列車が、我々の目標としてゐるモスコーに着くのは、夜中の二時頃になるらしいと、車内唯一の案内者であるツューリストの事務員が推定して、同地に下車する私達には（汽車が着いても、朝の九時まで車内に寝ておればよろしい。モスコーの旅客掛がその時刻に迎へに來る筈だ）と教へてくれたので、私達は安心して眠てゐた。汽車は少し早目に、十二時頃モスコーに着いたのに、私達は何も知らずにゐた。ところが、だし抜けに烈しく戸が叩かれたので、何事かと驚いて起上ると、（今迎へが來てゐるから直ぐ下りろ）と案内者が急立てた。

（何分間餘裕があるか）

（數分間だけだ）

（それでは仕事が出来ない）

（汽車が出掛つてゐる。今下りなければ、次の驛まで行かねばならぬ）

他の乗客は伯林直行だからいいが、私の心には次の驛と云

ふのは、暗闇の驛なのだ。兎に角言争つても仕方がないので、災難が頭上に落ちかゝつてゐるやうな氣持で、衣服もろくに身に着ける間もなく、靴も鞆も抱へて下へ飛下りた。列車ボーイやツューリストが、私達の持物らしいものゝ一切を、慌たゞしく棚から洗面所から浚つてブラツトホームへ落した。私達二人は、何がやら分らずに、ツューリストの出迎人の後を追つて、小走りに場外に待合せてゐる小型の自動車まで急いだ。

東京出立の際に、インチューリストで相談するとロシア遊覽旅行には、宿泊食事見物も一切クーポンに依ることにして、豫じめその切符を買つて行くのがよろしい、不用意にあちらへ行つて、その場／＼で現金で支拂ふと非常に不經濟になると教へられたので、旅行の行動を極められるのが不愉快ではあつたが、外ならぬロシアの事だから、窮屈でも間違ひのないやうにと、教へられた通りにした。それで、十圓の電報料によつて、私夫妻の到着はこちらのインチューリスト會社に豫報されてゐるので、出迎へる社員は、番號のついてゐるこの二人を荷物ぐるみ宿へ送届ける義務を機械的に背負つてゐるので、少し待つて呉れと云つても、斷じて承知しないのだ。帽子を車中に忘れたらしく、私の頭には置かれてゐないのに私は氣づいた。

出迎への自動車の中には、所狭げに中老の米國人一人と若